

アメリカ言語教育の一考察

～小数グループのよみ評価について～

金 英 子

はじめに

IRA第20回年次大会が、1975年5月13日から16日まで、ニューヨーク市で開催された。この本会議に先立ちPreconvention Institute が関連した主題別にわかれて、20会場でおこなわれた。筆者が参加したInstitute 6は、AustinにあるTexas 大学のThomas D. Horn 司会のもとで“Updating Language and Reading Assessment for Linguistically — Culturally Different Populations : Instructional prescriptions and Attitudes” という標題で始まった。そのなかに、いろいろなトピックスがある。対象はクラスルーム教師、指導主事、教員養成関係者であった。ここで紹介するのはAssessment of minority Reading Disabilities について、テキサス大学のThomas OaklandとKevin Buckley が発表した論文をとりあげ考察してみることにする。

I 事例研究

この論文はよみ不能な子供達と発表者達が共に作業した時に用いたいろいろな戦術を評価し、レビューしたもので、その論点の中心はこの場合は主に、黒人小数グループ子供達の中に介在する教育心理学的評価におかれている。まず、教育的評価の意義について考察してみよう。

教育評価とは教育に関する価値にてらして生徒の学習、行動、その他の教育的事象を批判することである。つまり、評価しようとする対象を教育的な価値基準に照らして観察することである。教育における価値は多くの場合、教育の理念とか目標とかに具現されている。しかし、教育評価の目的を十分果す為には、生徒の知能、適性、学力、態度、興味、適応性、身体健康、環境など広く人格の全面から評価し、統合的に解釈しなければならないというのである。継続的なプロセスにより、その変化がとらえられる。現代の教育評価は診断的に、どこがよくて、どこに欠かんがあるか、内部状況を分析的に示すことに特色がある。

子供達の学問的困難を証言するために、どのように効果的に働きかければよいのか、実際の問題にであり教師達の助けになるような確かな評価技法が使用されているかどうかは疑問である。すべての子供によみの技術を最大限に発達させることができるかという点について、かんたんに解決する方法がないということも、今の所、事実である。ある一つの指導方法がすべての子供に効果的であるという証言はありえない。

よみの本質論として、まず、よみの重要性が、どこにあるかを明確にする必要がある。次は、よみ教授における広範な構造の認識があたえられることである。よみの達成は知識に通ずる道である。それはまた、すべての学問的な分野における成功にも通じる。なぜなら適切な情報を集める手段がよみによって得られるからである。個人に関する価値として、よみは全体的な人間形成の過程で、社会的価値もすべて含むようになる。よみは情緒的緊張感をやわらげ、人間に関するいろいろを問

題を見抜く判断と思考力を育て、個人的視点を広め、実際に創造の世界へ導く自己概念の確認することに機能する。

よみについては、いろいろな見解がある。よみの学習が受動的プロセスで、語は単なる補足にすぎないという誤解もある。しかし、人々はよみを通じて、全人類に独自に貢献し、お互いの目的、共通な業績をたえ理解する。そこから湧き上がる好意が自己概念を高めるのである。

そこで、よみ不能の子供達につき解決の方法を考えるいろいろな出版物があるが、それらは様々な主題について書かれた専門的な論文、実践的記録、その批判を反映するものの三種類にわかれる。しかしそれらのうちに、一貫して総合した効果をもたらしものを求めるのはむづかしい。

発表者の場合、3つの異った特徴をもつ介入モデルについて論議している。1) 特徴的、原因的、あるいは、医療モデル、2) 特徴的治療的、あるいは、プロセス・モデル 3) 問題分析モデルの3つである。この中で問題分析モデルが、小数グループのよみ不能者の原因を明らかにするためにもっとも効果的に作用するのではないかとわれている。

実際の例として発表者は4年生になる少年ヘンリーをあげて説明している。彼は黒人少年で市内の学校に通っているが、実際よみの場合、その進度が学年標準よりも1年半から2年もおくれたケースである。ウェブという担任教師がヘンリーの学問的能力を助成するには、十分な努力が必要だと判断してヘンリーの近所つきあい、社会的パタン、情緒的発達、その他の状況を知るようになる。

発表者はヘンリーの専門的治療をたのまれると、まず完全に援助できるかどうかについて、介入プロセスに入る前に、彼の生長、発達、学習、その他のよみに影響をおよぼした重要な要因になっているものについて考える。子供のよみの技術を知る場合、3つの重要なクラスターがあげられる。1) 子供の特徴 2) 父母によって提示される環境の特徴 3) 学校関係の特徴である。これら3つのクラスターそれぞれにつきヘンリーの診断介入活動に適當であるかどうかを理解出来る段階まで話しあう。

(1) 子供の諸特徴

子供の特性には、物理的健康、知能、言語と知能的可能性、並びに、社会的、情緒的、動機的特徴によって決定された学習に対する準備までも含められている。子供の成長と発育の調査では子供の発育に重要な影響をおよぼす諸要因つまり、物理的要求のクラスターでは酸素、体温安定、睡眠、食物、排泄など生存を維持するために、満足させなければならないものが明らかにされた。

最近の生医学調査では新陳代謝が人間に残す生化学的徴こうが、様々な方法で、人間の心理学的、社会学的、教育学的発達と絡みあっていることを明らかにした。さらに蛋白質の欠乏とビタミンの欠乏が、他の新陳代謝配列に問題を引き起こし、これらが多くの学習問題の起因となることを明白にしている。

望ましき心理学的成長は、ある望ましき場が存在する時におこる。その場とは、1) 物理的に密接に接する、2) 他の重要なものからのよい評価、3) 問題を超越する解決を支持する、4) 適当な行動を構成するにつき、不確実性を除くこと、5) 自治つまり強制的な統制から自由になること、6) 能力的によくやったという満足感、7) 適合つまり自身の期待と他者が望むものが一致する行

動、感情、思考、8) 刺激、9) 環境統制の意義など——の条件である。9つの条件は子供の人間形成に役立つ。

1966年CoImanによって報告されたデータに黒人の子供達にとって、特に注目された3つの要因がある。それは子供のよみにおける関心の度合い、すなわち学習に関連する学校のよみとは別に学校ではみられない独特の学習、自己概念、運命に対する統制意識である。調査のなかで変化しやすい測定は、家庭背景のすべての測定と学校であるとされている。けれども、とりわけ、これらの要因が3年生の段階で、すべての学力に深い関係をしめしている。

白人の子供達に比べ、黒人の子供達が学習とよみに高度な興味を持っていることが報告されているので、自己概念については、ほとんど相違がない。しかし、運命に対する統制の自覚意識が低い故に、きまぐれのような徴候をみるばあいがある。黒人の子供達は彼等の環境を統制すれば、生活だけでなく学問的にもよく出来る傾向を示す。恵まれたグループからの子供達は、その環境が役に立つならば対応出来る。

知性、言語、認知的能力については、他の子供の特徴がヘンリーのよみ学力に影響しうるものがある。よみが出力と入力のプロセスとして、知覚される場合、とくに視覚と聴覚の刺激が重要な役割を演ずるのである。

視覚の知性能力は知能的能力を統制した時、黒人白人両方の子供達において、同等に発達しうる事が確認される。しかし小教グループの低い社会経済地位からの子供達がミドルクラスの子供達に比べて視覚的知能的問題を多くもっていることが実証されている。聴覚知能力には、種族あるいは社会階層の諸相異があまり反映しないが、低階層出身の非標準語を使うもの場合、比較的困難をもっていることがわかる。

子供達の言語特徴の研究では、言語能力がよみ学力に決定的な影響をおよぼしている。よみの定義を発達心理学および言語学的基礎に求める中で、よみが思考過程と言語能力に大きく影響されることを、学校教育のカリキュラムは強調している。

受容と表出、言語能力の発達、伝達における重要な両輪として言語的素養を向上させるばかりでなく、近い将来よみを基礎教科として変えていくプロセスという見地からも大事に見られている。その時期は就学前から1年生の間で、よみ、かき、きく、はなすの各言語活動について注意を促している。

小教グループ別に、メキシコ・アメリカ系、インディアン・アメリカ系、アフリカ・アメリカ系ならびに黒人子供達の言語能力を調査した研究で、音声的、統語的、文法的相異がよみの困難の理由になりうる事がしきさされている。

知能的能力と学問的発達との相関関係は、研究調査を通じてもっと注目されるようになった。ひとつの発見として学力適正を測る知能テスト(IQ)による単一的評価よりも、いろいろな社会階層、小教グループの子供達を統合し総合的見地から評価する方法が学校教育を続けるなかで、より正しい相関関係を示してくれる。ただし、低学年でのよみ学力は他のプロセス変容に伴うよりも、学力発達測定において高度な相関関係がみられる。

ヘンリーの人間形成、知覚、言語と認知的諸特徴が治療介入モデルの尺度を終えた時、はじめて将来の解明とレビューが保証される。

(2) 父母の諸特徴

父母は多くの面で、主な教育的プロセスに関与する。ヘンリーの生理学的、物理学的、心理学的諸特徴は、父母の先天的関与の一部分で決定されるが、それは影響の出発点である。発達段階では環境の影響のほりが強い。特別な父母の特徴に関する調査は、小数グループの黒人子供達のよみ不能について、少くとも決定的な影響を与えないことを明らかにした。むしろ重要な要因は環境である。

家庭環境の不十分さは手や心で経験される。形、大きさ、色などであそぶおもちゃの効果性がよみの能力に影響する点があげられる。家族対話の経験が不完全な場合、新しい語を伴う表現が自由に訓練される機会が不十分になる。特に、形容詞、副詞の練習が乏しい。

Beinsteinは家族の言語活動のシスマテックな研究を行った。比較的多くの家族例で分析された結果によれば、小数グループの使う言語と中産階級において使われる言語の内容は、特に複雑性において異っている。だから、学校で期待している念入りを言語を小数グループの子供達がなっていない限り、彼らは学校で使用する言語に困難を感じるばかりである。

経験心理学的な方法を用いた研究では、社会的に恵まれぬ小数グループのよみを条件づける要素として、聴覚、視覚上の欠陥があげられているが、それらは耳や目という外的器官の欠陥でなく、時間、数、その他の基礎概念で、みる、きく、思考するという習慣が不適切であることに由来すると思われる。

子供の認知発達の要因をなす家庭での経験を分析する時、学歴前の経験の差異、つまり十分準備ができていないものと、その準備が不十分なものとは大きな開きが生ずる。個人的意識の強い父母のもとで育った子供達は、もっと複雑な言語知識を発展する傾向がある。彼等自身の見解を主張する機会が多くあたえられたからである。また、他の家族がみんなについて語り合い場でよく聞く立場におかれる機会がある故、きく練習も十分にもつ機会があるところから言語能力の差を見る。

学力に対する黒人家族の構成影響を調べた研究では、学力不十分の子供の父母がもっとも厳格で統制する傾向がある。彼らは肉体的に罰する一方、感情移入の表現に欠け、伝達パタンの不完全さが父母に関する議論で浮彫にされている。

多くの子供達は学校教育に対する不適応と、社会の主流に含まれなかった父母の怒りと恨みが否定的な要素としてあらわれ、学問的成功、引き継ぐ職業、財政、社会的報酬を得ることに失敗する。一般的な学校での行動と道徳的判断における父不在による否定的な影響が研究の成果で明らかになった。それは子供達のよみ能力に複雑な影響をもたらしている。

母親が子供達にどのように影響するかの研究は、指導スタイルと母子相互間の関係に焦点を合わせて行われた、小数グループの母親達は直接行動的で命令的であるが指導的ではない。彼女達は子供達が問題解決をする際に、理解の助けになる指示を与えることができず、そのうえ子供達がおこなっていることが正確かどうかということについても見当がつかない。子供の公的教育の期間中永

統する重要な責任が残されている限り、父母の適格な判断がこの責任感を養うために、より役立てられるべきなのであるが、母親達はそれができない。

(3) 学校の諸特徴

教師と行政関係者は学校を通じ、それぞれのクラスの中で適切な雰囲気を作成する役割を持っている。さらに教育の目的に対するスタッフの原理、はっきりした目標を設定して成長を激励する適切な学習経験を構成する能力、生徒達に対してもっている向上心と期待心などが、ヘンリーの学習に影響しうる重要な変容のセットをなす。小数グループを扱う教師には、文化的に、社会的背景の異なる言語についての困難性等について特別な注意を含めた専門的な資質が要求される。教師の学問的学習経験の重要性を行動支配で強調される指導戦術によって、教師は子供達の評価の重要性を更新することになる適切な目標に向う。

教師の期待と伝達のモデルが学力の重要な修正を期する。教師が高度な期待をもった生徒達との相互関係と、低い期待しかもっていない子供達との相互関係を比べてみた場合、教師自身の態度が批判的で強制的な面を低い期待しかもっていない子供達にむけられていることをみのがしてはならない。殊に小数グループを指導する教師に大切なのは、こころがこもっているかどうかということで、それが学習の成功、失敗を決定する。子供達の言うことをあたたかく聞く耳をもつことがのぞまれるわけである。

学校の諸要因がよみの学力に影響していることを示す。ニューヨーク市の教育局で刊行されたりビューによれば、2つの小学校における教師と行政関係者との実践の比較の結果、生徒達の家庭環境、言語の困難性、移動性については、ほとんど変りないが、よみの学力においては異なったことについてみられる。

すなわち、よみ学力について2つの学校が採用している教育方針、態度、プロセス、実践による指導の効果性、教師達の訓練程度、経験、教材の適切さ、よみ指導のアプローチについては相違点が認められなかったが、唯一点、学校の行政的チームの能力がとても異なっている点である。

一方の学校では、生徒、教師、父母が平和的に学校の方針に協力する好ましい雰囲気のなかで、企画した決定がたやすく実践に移され、子供達ももっと多く学ぶように多くの機会が与えられる。しかしもう一方では、有意義な教育的プログラムをもっているが、実践面では大きな混乱が見られる。行政的行動と方針が直接、子供達の教育に影響をおよぼす。主要要因は子供、父母、教師、行政関係者、地域社会の人々の間における相関関係、すなわち人間関係である。

適切で効果的な治療的介入モデルから学問的能力と行動は開発を目標とするシステムが構想されねばならない。そのシステムは、1) 継続的であり、2) 教授的に適切である行動に焦点があてられ、3) 改善出来る諸行動が強調され、4) クラスルーム教師がキャンパスの他の教育者(管理者、行政者を含む)と共に責任があることを認知し、5) 彼等に役に立つ特別な情報を与えるために必要である。3つの治療介入モデルは、これらと他の基準との関係で評価され記述される。

II 三種類のモデル

(1) 特徴的原因的モデル…医療モデル

最初のモデルは病理学的、物理学的、心理学的方法で、ヘンリーのよみ不能の原因を説明することである。多くの治療的事例研究を通じて、栄養的、物理的、解剖的、変化の不秩序、病気、頭悩、破かい、発達の欠乏、或は肺などが不能の理由の主なものである。

代表的な方法は薬物治療、個人指導、カンセリング、学校のなかでの心理療法、病院あるいはクリニックなどである。子供は視覚、聴覚を総合的に評価され医療検査を受けねばならない。学問的、社会的、情緒的諸問題は睡眠不足、不適切な栄養、その他の子供の身体的健康に由来する。

心理療法とがカンセリングは子供にとって生活指導的な援助方法であるので、直接的に学問的発達に導かない。このモデルに伴う基礎問題は典型的に教育的介入をさせていることである。

不十分な注意しかヘンリーの能力とよみ技術に関する理解に与えられない。そこでヘンリーのよみの技術を改善するために、またそのためには、教授プログラムがどのように作られるかということについての具体的な示唆が提供された。教師がヘンリーの効果的学習をあまり期待してなかったことがみられる。

(2) 特徴的診断的モデル…プロセスモデル

このモデルには子供と学校が関係して来る。よみにもっとも重要な関係がある研究を通じ、同一化した特別な過程能力をテストすることによってよみ不能の原因をあきらかにする傾向がある。子供の知覚に確信をおき、言語と認知的諸能力が、よみ学力の基礎をなす意義あるプロセスの中で、構成されている標準化されたテストにおいて、この分野でのヘンリーの助けになりうるというレポートをウェブに送る。それは、言語、知能理解における弱点と強点、そのアウトラインを文書にして、ヘンリーの知覚力を発達させることによってもっとよくよめるようになりうるとしらせる。

このモデルについては直観的に教育者が意見を持ち、初等学校でよく用いられる。しかし、その前に必ず知っておくべき3つの基礎的疑問がある。1) 最初の知能力言語、IQの標準化したテストの後、教授の決定をする場合、個別化した子供によって用いられるこれらテストに十分な信頼度が関係するだろうか、2) これらの能力を発達させるにつき、成功的に介入出来るかどうかである。3) もし、子供の知覚と言語あるいはIQを発達させることが出来れば、よみ改善に導かれるだろうか。以上の3点である。

① 聴力の知覚 標準化したテストによって聴力知覚の諸技術を高めることと、よみの学力は関係するだろうか。また、テストが子供達の個々人の治療に用いることが許される程充分関係があるのか。Hamhill と Larsen(1974)の33の適切な研究のレビューはよみと聴力諸技術の最近一般に標準化したテストによって測定された時、実際に用いるには、あまりにも低すぎると報告している。

同じ結論がMorency(1968) Dykstra(1966)による、よみと聴力知覚の相関関係研究に関するレビューで出て来ている。最近の研究も聴覚能力が標準化されたテストのよみとはあまり関係ないことを示唆している。したがって治療的に有効でない。また、最近黒人の子供達の調査が以前のプログラムを使って行われたが、その結果もやはり効果的ではないという。さらに、聴力知覚の不能な子供達が特別な諸技術訓練を聴力改善のためうけたものも、受けなかったものも、よ

みの発達に早さにあまり差はないのである。だから、最近聴力知覚能力とよみ技術発達につき黒人の子供達のため企画した介入プログラムは注意をひかない。

② 視力知覚 同じ結果が視覚能力を調査した文献の中からも導き出された。

Hamhill は最近の調査において訓練された視覚知覚が学校の学習を助長しないこと、視力知覚プロセスは訓練され得ないことを示した。結局介入するプログラムではなされないことがわかる。

視力と聴力技術がよみにとって重要であることが否定されたのであるが、それにもかかわらず、これらのテストは最近標準化されたテストとしては評価されよう。1) よみとの関連が識別されて来る他の方法がたやすくしたのよりも低い 2) 一般に個々の正確な治療をなすのがあまりにも低く関連している 3) 比較的一般的な介入プログラムを通じ主要な改善が受けつけない。

③ 言語能力 学校教育の成功に、言語能力の関係とどう抜けていくか、学問的成功に伴う関係について Peabody Picture Vocabulary Test (1955、相関は.20と.40) が利用されよう。もっと言語能力を総合的にテストするものとして、Illinois Test of Psycholinguistic Abilities (ITPA) があるが、これはよみと関係してない。

(Newcomer and Hamhill) また、話し言葉とよみの学力間の関係もテストの種類によって一定ではない。[.35(Rich 1972), .69(Efort 1974)] 話し言葉測定からのデータを用いた文法的能力は、黒人子供達の間で、よみ学力に伴う音声的能力よりも、いくらか高い関係を示している。

言語能力とよみ学力を向上するために企画した介入プログラムが Hamhill と Lassen (1974) の研究によって、あまりよく出来ない子供達に心理言語学的訓練を調査した16の事例につき論評している。これら研究の主なものも ITPA で子音の心理言語学的能力が向上したようにみられている。言葉の表現、一般的言語能力がもっと介入に対応する。よく出来ない子供に対する個別化した活動の場合、成功があきらかになる。また、言語訓練が個別化されないグループ・メソッドで、ピーパーテ言語開発キットを使用した時も成功がはっきりする。言語能力改善に僅か成功があるにしても、一般言語プログラムの結果としてよみにおける改善は出来なかった。

④ 知能 IQとよみ学力が常に一貫してない相関関係であるにしても、相関関係数は、一般に.45から.75 (Matarozzo 1972) である。IQテストが個々の生徒達に有効である時、文献におけるIQ修正がおとろえていとされている。しかし、最近一般の知能可能性をもつ子供についても、彼のよみ学力を引上げる成功なプログラム開発が可能でないことを強く示唆されている。よみの改善を伴う知能の改善が一諸に出来るという論文を支持している証拠はどこにもない。知能力が重要な変容の相と学問的発達に関係づけているのが考慮されたとはいえ、これらの能力が改善するところみは成功してない。

したがって、このモデルは実際のよみの改善にはあまり役に立たない。ヘンリーについて明らかな情報をあたえられるモデルとして利用されたにとどまり、教育的に適切なプログラムが基本分析されたのちは、このプロセスモデルは無視されるようになった。

(3) 問題分析モデル

治療介入モデルの中でもっとも適切なのが職務分析アプローチである。このモデルは子供達の学問的学力の特別な部門につき、彼等がのぞましき教授的目的に向上しうる能力、態度、興味を決定するためのものである。モデルにおいて構成されている技術と態度がよみの能力の開発に直接位置づけられ統制したものをもっと複合した用語行動として、教授的よみに関連していると強調する。タスク分析アプローチに必要なのは、よみの教授的目的シーケンスの一般範囲を生成させることである。ヘンリーの教授的プログラムは教育的目的に出合うヘンリーが最初の戦術を通じて新しい次の段階の仕事始める。もし彼の仕事が適当でない場合、もっと効果的な教育教材、方法、教授技術を探し続ける。ヘンリーの活動を観察し、教育目的が教授プログラムにありまで彼のタスクを評価する。

評価のプログラムは専門的諸技術、能力と態度を助け、ヘンリーもまた、彼が既にもっているものにこれから得ようと求めるものを同一化する。標準化した基準的な提示測定が、子供の成功を判定するものではない。治療教授プロセスとしてのタスク分析は、教師と子供の間で構成された尊敬とお互いの理解により関係が特徴付けられた時、もっとも効果的でありうる。このシステムは知覚の改善を認知する諸技術をらびに諸能力をつける可能性を考慮する。プログラムにはヘンリーを成長させ発展させるに、十分な方法や材料が盛り込まれている。

小教グループと一緒に仕事をするにつき、適切なモデルの中で、他のどのモデルよりもこのモデルはもっとも学問的能力と行動の改善が集中的に行われることを可能にし、したがって、そのシステムは活発化する。この論文はよみ問題をかかえている小教グループ子供達と、もっと効果的に仕事をするに関連した基準につき、3つの治療介入モデルを再考察し評価している。望ましいタスク・モデル・アプローチにより、クラス行動を注意深く追求し、学力に対応して変化している他の問題を共に扱う。

ここで言えることは過去10年間、評価技法使用の効果について、適切に用いられるべきであることが証明された。学校地区での非公式な観察、提示された基準、提示された基準測定の使用がもっと選択的で漸進的になっている。3つのモデルすべてが、教師、行政関係者、父母、その他関与する人々によってなげかけられた疑問により正当に使用される。

発表者が論議して来た評価実験は成功裡に、ヘンリーの地位向上を発展させるために役立ち、いろいろな技術と能力を養い、人々を賢明にすることを助け、もっと効果的な教育プログラムの中で結果する決定を報告したものである。

おわりに

文化的に社会的背景の異なる小教グループのよみ困難を明らかにする原因の究明について、このケースでは3つのモデルのなかで問題分析モデルが、もっとも効果的に作用するのではないかとされている。このモデルは子供達の学問的学力の特別な部門につき、彼等がのぞましい教授的目的にまで向上しうる能力、態度、興味を決定するものとされる。

治療プロセスとしてタスク分析は、教師と子供の間における尊敬とお互いの理解によって関係が

特徴づけられた時、もっとも効果的でありうる。

参 考 文 献

Hammill D. and Larsen S. The relationship of selected
auditory perceptual skills and reading ability
Journal of Learning Disabilities 1974

Thomas Oakland with Kevin Buckley
Assessment of minority Reading Disabilities Paper
presented to the International Reading Association
Preconvention Institute on Updating Language and
Reading Assessment for Linguistically-Culturally
Different Populations.